

一宮市 博物館 だより

No.67 2024.3

もくじ

令和5年度 博物館アルバム	2
新指定または登録の文化財について	10
令和6年度企画展「いちのみやの文化財」	11
資料紹介 日本南画協会「一宮支部発会図録 全」について	12
収蔵資料紹介 法圓寺中世墓遺跡出土 蔵骨器について	16
資料紹介 一宮の墨書土器について	18
令和6年度催し物予定	20



企画展「くらしの道具 妖怪ぞろぞろ」大変身!ようかいになっちゃおう!みんなでお面づくりワークショップ →3ページ



企画展「くらしの道具 妖怪ぞろぞろ」 唐傘など →3ページ

所蔵品による企画展「川合玉堂 四季を描く」
令和5年4月22日(土)～5月28日(日)

一宮市木曾川町に生まれた日本画家・川合玉堂(1873～1957)は、四条派、狩野派など江戸時代から続く諸派の画風を学び、独特の诗情あふれる画風を確立しました。当館では近年春の企画展で玉堂の作品を紹介していますが、今年度は四季折々の情景を描いた作品や新収蔵の書簡など23点を紹介しました。

関連催事として、4月30日(日)にワークショップ「つまみ細工で春の花をつくろう」のほか、5月28日(日)に「ミュージアムコンサート」を開催し、学芸員のスライドレクチャーの後、市内在住のエレクトーン奏者・太田英美さんに四季にちなんだ楽曲を演奏していただきました。



展示風景



ミュージアムコンサート

夏季イベント「博物館で夏祭り！」
令和5年7月8日(土)～8月31日(木)

平成29年度から毎年恒例となった、小・中学校の夏休み期間中に合わせて開催するイベント「博物館で夏祭り！」を今年度も開催しました。

子どもたちに博物館を楽しみながら知ってもらうために始めた「チャレンジ! いちはくワークシート」では、今年も何種類かの期間限定ワークシートを用意しました。レベルが異なるクイズ内容は、簡単に答えられる問題から、大人でも考えてしまう問題などさまざま。イベント会期中は500名以上の子どもたちが挑戦してくれました。全種類のワークシートを持って、楽しそうに「答えがわかった!」と言いながら、館内を巡っている子どもの姿も見かけました。

そのほか体験講座として、市内で染色教室を開いている智香さんを講師に、身近な植物を使って草木染めを行う「染めびと・智香さんと一緒に布を染めよう」(全2回)を開催しました。はじめに、「台所でできる染色」をテーマに、草木染めとはどんなものか、どうやって布に色が付くのかという染色の流れなどについて学びました。その後、ビー玉や輪ゴム、糸などを使って布を絞り、模様をつけていきました。染め終わった時の模様を想像しながら布を絞った後は外に移動し、染色を行いました。今回は生葉の染色液と、講師が用意したピーマンの葉の染色液を使用しました。藍の生葉染してもらいました。染色液はもともと茶色やモロヘイヤスープのような色で、「ピーマンの葉は黄色になるよ。麻の葉は水色になるんだよ」と講師に言われましたが、子どもたちは「本当にきれいな色になるのかな」

などと最初は不思議そうでした。実際に染めてみると言われた通り、すてきな色になりました。

さらに、昨年に引き続き、博物館・三岸節子記念美術館・尾西歴史民俗資料館の3館連携企画として、3館を巡ってスタンプを集める「いちのみやミュージアムズ 3館deスタンプラリー」も開催し、こちらも多くの子どもたちが参加しました。

今後もしながら、興味を持って学んでもらえるような取り組みをさらに充実させていきたいと思っております。

(学芸員 吉川ひとみ)



チャレンジ! いちはくワークシート



「染めびと・智香さんと一緒に布を染めよう」

企画展「くらしの道具 妖怪ぞろぞろ」
令和5年7月8日(土)～8月13日(日)

今のように電気やガスが普及していなかった時代の生活道具を中心に、子どもたちが楽しみながら昔の暮らしや道具について学ぶことができる「くらしの道具」を今年度も開催しました。例年開催している1月から3月の期間ではなく、夏の開催となったことから、テーマを「妖怪ぞろぞろ」とし、生活道具を「妖怪」に見立てて紹介しました。それぞれの道具の説明に「唐傘お化け」や「提灯お化け」など約40体の妖怪のイラストを付けて、子どもにも親しみやすくなるように工夫しました。期間中は、多くの家族連れをはじめ、幅広い年齢層の方にご来館いただきました。

期間中の関連催事として、作家・山本マヤカさんと、いちのみやういーぶによる「大変身！ようかいになっちゃおう！みんなでお面づくりワークショップ」(全2回)では、スプーンや髪留め、ボタンなど身近にあるモノを妖怪に変身させて、オリジナルの「ようかいお面」を作りました。参加した子どもたちは家から持参した様々なモノを布や紐などの他の素材と組み合わせながら、自分が想像する妖怪を作り、最後はその妖怪になりきってもらいました。また、工作体験「妖怪ポップアップカードをつくらう」も開催し、「五徳」と「火吹き竹」が登場する妖怪「五徳猫」をモチーフにしたポップアップカードを作成しました。この工作体験では、ただ作るだけではなく、道具に興味を持ってもらえるように実物を会場内に展示し、使い方や工夫を紹介しました。さらにカードにも道具の説明を入れるように、実際に動かした時に道具を使う時の動作ができるようなしなやかな紙を考えるなど、作りながらも学べるように工夫しました。

また、例年の企画展「くらしの道具」と共に行っている市内小学校42校の見学については、オンライン見学と来館見学のどちらかを選択してもらいました。夏季の企画展の開催期間中も来館見学の希望があれば受け入れを行い、4校の来館見学がありました。その他の学校については、令和6年1月19日から2月14日の期間中、32校がオンライン見学を、6校が来館見学を実施しました。多くの学校はオンライン見学希望ではありましたが、少しずつ来館見学を希望する学校も増加してきています。オンライン見学、来館見学のどちらも、子どもたちからは見学を通して感じた道具への疑問や質問などをたくさん聞くことができ、質問に答えながら昔のくらしや道具に興味を持ってもらえたと思います。

今後も子どもたちをはじめ、多くの年齢層の方に昔のくらしや道具に興味を持ってもらえるような展示ができるよう工夫していきたいと思っております。

(学芸員 吉川ひとみ)



展示風景



妖怪ポップアップカードをつくらう



みんなでお面づくりワークショップ

尾張平野を語る27

「二宮の発掘調査」あの頃の発掘現場

令和5年7月17日(祝)・23日(日)・30日(日)

「尾張平野を語る」は自然・考古・民俗・歴史・美術工芸などさまざまな分野の講師を招き、尾張平野の歴史と文化を紹介する連続講演会です。27回目を迎える今年度は、同時期に開催していた特集展示「どきどきフレンズとその出身地」と関連付け、館蔵の土器を擬人化したオリジナルキャラクター「どきどきフレンズ」の出身地である遺跡の発掘調査を行った方に講師をお願いし、「二宮の発掘調査」あの頃の発掘現場」というテーマでご講演いただきました。当時の出来事を自由にお話していただきたいという思いから、オンラインでの配信は実施しませんでした。

7月17日(月・祝)は、どきどきフレンズの「はっちー」と「ころりん」の出身地である八王子遺跡の発掘調査を担当した樋上昇氏に講演していただきました。

八王子遺跡は、東海北陸自動車道建設に先立って行われた調査で見えられ、弥生時代の初めから中世にかけて、ほぼ途切れなく人々の営みの痕跡が見つかっています。発掘調査報告書は、報告、図版、写真図版、考察と項目ごとに分冊され、最低100ページ、最大で300ページ越えという他に例をみない充実ぶりです。そんな遺跡の概略を講演会資料としてまとめさせていただきましたが、概略だけでも約40ページの大ボリュームになりました。当日は、短い時間の中で、発掘当時の思い出を交えつつ、八王子遺跡の成果の概要や印象深かった出来事などをお話していただきました。

7月23日(日)は、どきどきフレンズ「どきどきちゃん」の出身地である北川田遺跡、「あかみん」「あかまる」

の出身地である尾張病院山中遺跡が発掘された昭和30～40年代の発掘調査のお話を中心に、講演会のタイトルどおり「一宮の考古学のあけぼの」について、柴垣勇夫氏と当館の久保館長とで対談しました。

柴垣氏は、講演当時82歳で、愛知県教育委員会文化財室に勤めた経験もあり、昭和30～40年代の発掘調査や文化財行政の黎明期をその目で実際にご覧になっています。一宮市史編さん事業、愛知県の遺跡分布図や行政の発掘調査体制の変化、愛知県埋蔵文化財センターの設立、そして一宮市博物館の建設まで、当時を見てきたからこそその貴重なお話をしていただきました。

対談相手は現在の館長が務めました。当初は、当館の初代館長であり、一宮市ないし愛知県の考古学の礎を築いた岩野見司氏にお願いしていました。しかし体調を崩されて講演を辞退され、大変残念なことに8月に逝去されました。最期までこの講演会のことを気にかけていただいていたとのこと。謹んでご冥福をお祈りいたします。

7月30日(日)は、どきどきフレンズの「どき兄」の出身地である元屋敷遺跡の発掘調査を担当した土本典夫氏にご講演いただきました。

土本氏は元一宮市博物館学芸員で、元屋敷遺跡だけでなく、一宮市教育委員会時代の発掘調査を主に担当していました。報告書だけでは知りえない発掘調査当時の事件や裏話、工事立会調査で見つけた遺跡や遺物、地名からも探った墓の話など、写真をふんだんに使って、興味深いお話をしていただきました。

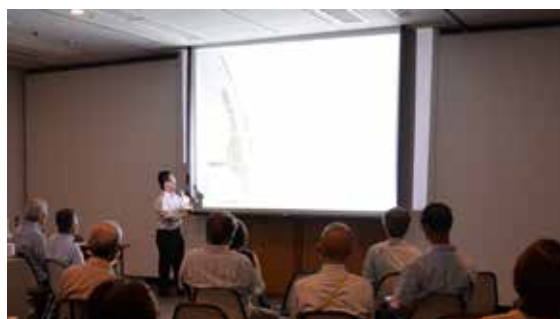
今回の連続講演会では、発掘調査を行った時代や、所属組織が異なる講師により、発掘調査や考古学研究の体制の変化などのお話を、それぞれの経験を交えて講演していただく大変貴重な機会となりました。どきどきフレンズの出身地と関連付けたことで、普段遺跡

や考古学には興味があつた方にも聞いていただける契機となったのではないかと思います。

(学芸員 瀧 はる香)



7/23(日)「対談：一宮の考古学のあけぼの」
柴垣勇夫氏(元・愛知淑徳大学教授) ×当館館長



7/17(月・祝)「『八王子銅鐸』発見の記～26年前のあの日あの時～」
樋上昇氏(公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター調査課 主任専門員)



7/30(日)「市内掘歩記 お墓見歩記」
土本典生氏(元・一宮市博物館学芸員)

企画展「尾張の文人画 森コレクションを中心に」
令和5年10月14日(土)～11月26日(日)

令和3年度に江戸時代の絵画等が当館に寄贈されました。これらは江戸時代前期から繊維を商った一宮市の森林商店(現在のモリリン株式会社)の森林兵衛(1855～1945)および森清次(林兵衛の娘婿、1883～1939)が収集した絵画で、おもに山本梅逸や中林竹溪など尾張の文人画家による作品です。

事業のかたわら二人は茶道をたしなんでいました。とくに林兵衛は昭和初期に煎茶の茶会を催し、その様子は茶会図録に記録されています。幕末から昭和初期には煎茶や中国の文化を貴ぶ文人趣味が流行し、実業家の間では煎茶の茶会がたびたび催されていました。林兵衛もその一人で、森家に伝わる絵画や煎茶道具は、茶会で用いることを一つの目的として収集されたものと思われまます。

本展覧会では、新たに寄贈された森コレクションの絵画15点のほか、脇田水石、岩田心齋、森半逸をはじめとした一宮の文人画家の作品など16点を加えて尾張の文人画について紹介しました。また江戸時代末期に活躍した陶工・青木木米による茶器など森家に伝わる貴重な煎茶道具24点も展示し、森家で催された「学温園茶会」および「竹翁金婚祝賀会」の二つの茶会について紹介しました。

10月28日(土)には、煎茶道具の調査にもご協力いただいた田畑潤氏(愛知県陶磁美術館・主任学芸員)に「煎茶全盛・茗謙図録の時代と森コレクションの煎茶道具」と題して、11月18日(土)には尾張の画家についての長年研究している吉田俊英氏(四日市市立博物館館長)に「尾張の文人画について」

江戸から近代への流れ」と題してそれぞれお話いただきました。吉田氏の講演会についてはオンラインでも実施しました。また11月4日(土)には担当学芸員によるスライドトーク「森コレクションと一宮の文人画家について」も行い、煎茶会に出品された絵画や一宮の文人画家についてお話ししました。

展示された絵画や煎茶道の中には、かつての茶会で実際に用いられた資料も多数含み、繊維産業で発展した一宮の豊かな文化の流れをご覧いただきました。

(学芸員 杉山章子)



煎茶道具



吉田俊英氏講演会



田畑潤氏スライドトーク



展示風景

企画展「いちのみやアートアニュアル2023」
令和5年12月2日(土) ～12月17日(日)

昨年度よりタイトルを「一宮市美術秀選展」から一新した「いちのみやアートアニュアル」も、今年度で23回目の開催を迎えました。今年度の広報印刷物には、一宮美術作家協会の大島麻琴氏の作品を掲載しました。

令和5年度に開催された第81回一宮市美術展等の成果を受けて、一宮市美術展市長賞受賞者11名、一宮美術作家協会・一宮書道協会・一宮写真協会推薦者62名の選りすぐりの作品が会場を埋め尽くしました。

昨年に引き続き、展覧会初日には開会式を挙行し、35名の来賓の方にご出席いただきました。また、14日間と短い開催期間ではありましたが、期間中には1014名の方々にご来館いただきました。今後この企画展がより一層美術振興に資するよう、関連催事など新たな取り組みを考えていければと思います。

(学芸員 吉川ひとみ)



開会式テープカット

当館では、一宮市萩原町出身の詩人・佐藤一英との関係から、棟方志功の作品を収集してきました。青森から上京した棟方は、同郷の詩人・福士幸次郎(1889～1946)を通じて佐藤一英と会い、一英の長編詩「大和し美し」を版画化しました。この作品を昭和11年に第十一回国画会展に出品すると、民芸運動の創始者たちに認められて世界的大版画家となる契機となりました。

所蔵品による企画展「版画芸術 棟方志功を中心に」
令和6年2月24日(土) ～3月24日(日)



展示風景



展示風景



石井頼子氏講演会



若月陽子氏ワークショップ

本展は、棟方志功の生誕120年を記念して、棟方志功(1903～1975)の「大和し美し」「空海嶺」などの作品のほか、志功とともに国画会で活躍した徳力富吉郎(1902～2000)、新版画の分野で活躍した名取春仙(1886～1960)、さらに一宮市出身の岩田覚太郎(1902～1999)、堀尾一郎(1945～)などの作品を展示し、多彩な版画芸術の世界を紹介しました。

2月25日(日)には一宮で版画家として活躍する若月陽子氏に、「コラーージュ版画をつくろう!」と題してワークショップを行っていただきました。また3月9日(土)には棟方志功の研究者の石井頼子氏にご講演いただき、貴重なお話をいただきました。

(学芸員 杉山章子)

特集展示コーナー

2階の常設展示室の一面で、博物館に所蔵あるいは寄託されている資料を様々なテーマで紹介しました。

●「墨コレクション 陣羽織と武家の家紋」

4月11日(火)～6月25日(日)

艶金興業旧蔵の毛織物コレクションの中から、葵紋や木瓜紋など、陣羽織の背にある武家の家紋に着目して、8点を紹介しました。期間中の5月5日(金・祝)～7日(日)には、「オリジナルの家紋缶バッジをつくらう」と題して、家紋のデザインに色鉛筆で色を塗った缶バッジを作成するワークショップも行いました。



家紋缶バッジ

●「どきどきフレンズとその出身地」

前期6月27日(火)～8月20日(日)

後期8月22日(火)～10月1日(日)

弥生土器丹塗壺をモチーフとした「どきどきちゃん」など、当館所蔵の土器を擬人化したキャラクター「どきどきフレンズ」9体の「出身地」(出土遺跡)や「同郷の仲間」(出土土器)を、前期と後期に分けて展示しました。



●「古文書にみる近世の一宮」

10月3日(火)～12月27日(水)

江戸時代の一宮がどのような社会だったのか、近世の庄屋文書の中でよく見られる「村の様子」「身分の諸相」「二宮の珍事件」の三つの視点から紹介しました。「二宮の珍事件」でとりあげた墨八百八の「記録」に残る「石塔磨き」をモチーフにした缶バッジを期間中に販売し、好評となりました。



石塔磨き缶バッジデザイン

●「織物工場の世界～絣工場から毛織工場へ～」

1月5日(金)～2月25日(日)

毛織物の産地として知られる一宮市では、幕末の開港以降、様々な種類の織物が織り出されました。現在の本曾川町などでは明治時代初頭から染め分けた糸と地糸で布地に模様を織り出す絣織物が広がり、群立した工場などでは綿や絹、絹綿交織の絣が生産されました。本展示では、絣工場を経営し後に毛織業へ転換した旧家の資料などを出品し、この地域で発展した織物業史の一端を紹介しました。



●「尾張の洋画 小島俊男と芸術大学の画家たち」

2月27日(火)～4月14日(日)

洋画家・小島俊男は昭和10年、名古屋市に生まれましたが、小島家の祖は現在の一宮市島村でした。東京藝術大学油画科に学んだ後、仏政府給費留学生としてパリに留学。その後もたびたび渡欧し、美しい家みや歴史的な建物を描いた風景画のほか、人物と風景を組み合わせた幻想的な作品も描きました。長く愛知県立芸術大学で教鞭をとり、平成30年に亡くなりました。本展では小島俊男の新収蔵の作品に加え、芸術大学で洋画を教えていた鬼頭鍋三郎、笠井誠一、島田章三の作品を紹介しました。



たいけんの森

毎週土曜・日曜・祝日（夏休み期間中は毎日）に開催している体験コーナーです。

「釣り竿で鮎つり」 4月1日（土）～5月28日（日）

企画展「川合玉堂 四季を描く」の開催にちなみ、玉堂が晩年を過ごした御嶽の溪流でさかんな鮎釣りを模して、紙で鮎を作り、マグネットのついた竿で釣って遊びました。

「どきどきパズル」 6月3日（土）～7月2日（日）・8月15日（火）～10月1日（日）

特集展示「どきどきフレンズとその出身地」の開催にちなみ、折り返すといろいろな土器の図版が現れる不思議な紙のパズルを作りました。

「道具妖怪をつくろう」 7月8日（土）～8月13日（日）
企画展「くらしの道具 妖怪ぞろぞろ」の開催にちなみ、しかけを動かすと道具が妖怪に変わるお面を作りました。

「掛け軸をつくろう」 10月7日（土）～11月26日（日）
企画展「尾張の文人画」の作品図版で、小さな掛け軸を作りました。

「プレスレットを織ってみよう」
12月2日（土）～1月28日（日）

特集展示「織物工場の世界」の開催にちなみ、毛糸でカラフルなプレスレットを織りました。

「五色刷り版画に挑戦」 2月3日（土）～3月31日（日）
企画展「版画芸術」の開催にちなみ、はがきサイズの版画を作りました。



釣り竿で鮎つり



プレスレット



土器の観察



掛け軸の取り扱い

キッズクラブ

継続会員に新規会員を随時加えて15名の会員に毎回メールにて案内を送り、実施しました。

● 5月14日（日）、企画展「川合玉堂 四季を描く」をワークシートを用いて見学した後、玉堂の作品図版を掲載したアートカードでゲームを楽しみながら、玉堂の絵の季節感などを感じました。

● 6月18日（日）、特集展示「陣羽織と武家の家紋」を家紋に注目して見学した後、各自オリジナルの家紋を描いた缶バッジを作りました。

● 7月23日（日）、企画展「くらしの道具 妖怪ぞろぞろ」を見学した後、「妖怪ポップアップカード」を、五徳など実際の道具を観察して作りました。

● 9月10日（日）、特集展示「どきどきフレンズとその出身地」を見学するほか、土器の実物に触れて細部の観察も行いました。

● 11月12日（日）、企画展「尾張の文人画 森コレクションを中心に」を見学し、和室にて掛け軸の取り扱いを体験しながら表装について学びました。

● 2月4日（日）、織物工場を分かりやすく紹介したパワーポイントでその特徴を学んだ後、特集展示「織物工場の世界」を見学しました。

● 3月24日（日）、企画展「版画芸術 棟方志功を中心に」をワークシートを用いて見学しました。

博物館実習

8月1日（火）から8月5日（土）までの5日間、愛知県立大学、愛知学院大学、愛知淑徳大学、同朋大学、滋賀県立大学、立命館大学から各1名、全6名の学生が、学芸員資格の取得に必要な実習を行いました。館内の設備や館の主な活動についてレクチャーを受けた後、民俗資料や古文書の整理、掛け軸の取り扱い、パネルの壁面への展示などの実習を行いました。また期間中、常設展示のワークシートを各自作成することを課題とし、実習の合間に準備して最終日に発表してもらいました。展示物と市内の地域を結び付けるクイズや古文書を用いたもの、デザインに注目したものなど、いずれも工夫の見える力作でした。どのようにして来館者に博物館を楽しんでもらうか考える良い機会になったと思います。



古文書の取り扱い



民俗資料の取り扱い

資料貸出

● 奈良文化財研究所「馬見塚遺跡出土資料」35点（調査のため）。

● 一宮市尾西歴史民俗資料館「織の技術と歴史を探る」（7月1日～9月3日）「手紡ぎ手織り木綿裂」など4点。

●名都美術館「生誕150年記念 川合玉堂―心に響くノスタルジックワールド」(10月13日～12月10日)に川合玉堂「奔濤遊猿」「五月雨」。

●あべのハルカス美術館「円空―旅して、彫って、祈って―」(2月2日～4月7日)に当館寄託の円空「大黒天立像」「観音菩薩立像」「薬師如来立像」。

古文書講座「古文書にしたいしむ」

1期生(新規受講生)9名を迎え、例年に引き続き、元一宮市文化財保護審議会委員の小川一郎氏を講師に実施しました。今年度は、中島郡築込村の庄屋を歴任した加藤家に伝来した文書(築込村加藤家文書・館蔵)より、文化14年(1817)「毎月之心得」と「年中心得」を読み進めました。

昨年度同様、全回とも博物館に隣接する妙興寺公民館2階大会議室を会場に講義形式で実施しました。令和6年2月10日(土)には全10回の講座を終え、3期生3名が3年間の課程を修了しました。令和6年度も引き続き開講します。

市民文化財めぐり

毎年11月1日から7日までの1週間は「文化財保護強調週間」です。この期間中には、文化財に親しむことを目的として、各地で様々なイベントが開催されます。一宮市では昭和42年以来、この期間に合わせて、市民文化財めぐりを実施してきました。

今年度は「起地区の文化財を巡る」をテーマに、11月9日(木)に開催しました。27名の参加者とともに、尾西歴史民俗資料館から旧湊屋文衛門邸まで約1kmまでを文化財保護審議会委員や学芸員の解説を聞きながら歩きました。

【見学コース】

尾西歴史民俗資料館(起の山車祭礼、旧林家住宅主屋及び裏座敷、旧林氏庭園) ↓高札場跡、船橋跡 ↓宮河戸跡 ↓大明神社(起の大イチョウ、起のヤマガキ、起のイブキ) ↓金刀比羅社(尾西木曾川水没遺跡、定渡船場跡) ↓旧湊屋文衛門邸(旧湊屋店舗兼主屋、旧湊屋土蔵)



文化財防火デー関連行事

昭和24年1月26日に法隆寺の金堂が炎上し、壁画が焼損したことから、この日は「文化財防火デー」に定められています。博物館では毎年、文化財防火デーに関連して、文化財防火訓練、文化財管理者研修、文化財防火パトロールを消防本部と実施しています。

■文化財防火訓練・文化財管理者研修

1月25日(木)に小信中島にある堤治神社境内で消防本部と協力して実施する予定でしたが、前日の荒天の影響から文化財防火訓練は中止となりました。

文化財管理者研修は、予定通り小信中島公民館(墨会館)で開催しました。消



防本部や一宮警察署の方から防火・防犯についてお話しいただき、文化財管理者の方に防火や防犯についての意識を改めて高めていただきました。

■文化財防火パトロール

2月16日(金)、市指定文化財が所在する千秋町・浅野地区などの寺社6ヶ所にて実施しました。消防本部の職員とともに、文化財の管理状況の確認と、防火設備の点検指導・防火指導を行いました。

【パトロール場所】

龍光寺(千秋町) ↓法光寺(千秋町) ↓禅林寺(浅野) ↓真珠院(三ツ井) ↓往生寺(多加木)

民俗芸能公演

民俗芸能公演は、伝統芸能の保存継承に貢献するため、現在でも市内で活動を続け継承されている無形文化財、無形民俗文化財の保存団体による公演を行うものです。

今年度は、宮後住吉踊と島文楽(ともに一宮市指定無形文化財)の公演を3月17日(日)に妙興寺公民館にて行いました。

【演目】

宮後住吉踊・豊年、かつぼれ、深川、すがわき、おん島文楽・傾城阿波の鳴門「巡礼歌の段」



島文楽

新指定または登録の文化財について

■文化財とは

文化財とは、文化庁のウェブサイトには「我が国の長い歴史の中で生まれ、はぐくまれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民的財産」とあります。これらの貴重な文化財を保存・活用し、後世に引き継いでいくための法律として文化財保護法があります。1949年（昭和24）の法隆寺金堂壁画の消失を契機に1950年に制定されました。

●文化財の種類

文化財保護法では、建造物や美術工芸品等の「有形文化財」、音楽・演劇等の「無形文化財」、民俗芸能等の「民俗文化財」、史跡、名勝、天然記念物等の「記念物」、里山などの「文化的景観」、宿場町等の「伝統的建造物群」の6類型があります。

■新指定・登録の文化財

令和5年4月1日に愛知県文化財保護条例の一部が改正され、従来の指定制度を補完するものとして愛知県文化財登録制度が新設されました。指定文化財との違いとしては、指定文化財が所有者に対して所在場所や現状の変更等について規制し、補助金などの支援で文化財の恒久的な保護を図るのに対して、登録文化財は規制が緩やかで、所有者の自主的な文化財保護を促進する制度です。登録文化財に登録することで、所有者や担い手の方たちの保存・継承に対する意識を高め、幅広く保護の網をかける効果が期待されています。

一宮市では、令和5年8月4日に県指定文化財に1件、県登録文化財に2件が、それぞれ指定・登録されました。

●木造釈迦如来及両脇侍坐像

昭和46年6月8日に市指定文化財に指定されていたものが、県指定文化財となりました。妙興寺仏殿に本尊として安置され、中央が釈迦如来、左脇侍が普賢菩薩、右脇侍が文殊菩薩となっています。妙興寺創建当初の1365年（貞治4）に開眼供養したと伝えられ、作風と年記から院派仏師の作であることがわかっています。また、保存状態が良く、南北朝時代彫刻史を考える上で重要な作であるとして評価されました。



美術院提供

●木造弁才天坐像

愛知県として第1号の県登録有形文化財（彫刻）となりました。妙興寺境内の弁天堂に安置される宇賀弁才天坐像で、妙興寺創建後まもなくの南北朝時代に造立されたと考えられます。同坐像が日本各地に現存する中、南北朝時代にさかのぼるものは多くないこと、院派系仏師による作例が貴重である点が評価されました。

●木造南無仏太子立像

第2号の県登録有形文化財（彫刻）となりました。妙興寺客殿の須弥壇上の小厨子内に安置され、様式から、鎌倉時代後期から南北朝時代の作と考えられます。優れた出来栄から、保護し後世へ伝えていくために登録されました。

■その他の文化財の動向について

新指定、登録以外の今年度における文化財に関するニュースを一部紹介します。

令和6年2月に国指定名勝及び天然記念物の木曾川堤（サクラ）について、安全確保や景観維持の観点から倒木の恐れのある立枯木を伐採しました。

また、新型コロナウイルス感染症の影響等により中止していた祭礼が再び開催されました。市内にはたくさんの方々の民俗芸能保存団体が存在しており、祭礼や公演を通して民俗芸能などの民俗文化財や芸能などの無形文化財の伝承に取り組んでいます。ぜひ足を運んでいただき、地域に古くから伝わってきた文化財のすばらしさを感じていただければと思います。

■文化財を守り受け継いでいくために

所有者や担い手だけでなく、地域住民が、地域の歴史を語るうえで欠かすことのできない文化財に誇りをもち、大切に守り伝えていくことが必要です。

当館では、文化財の展示による紹介のほか、「市民文化財めぐり」や「民俗芸能公演」などを開催し、市民の皆様が文化財に触れる機会を作るよう努めて参ります。

（学芸員 吉田茉由）

令和6年度企画展「いちのみやの文化財」

文化財は、文化財保護法によると、「我が国にとつて歴史上又は学術上（芸術上）価値が高いもの」とされています。一口に文化財といっても、その種類は実に様々です。仏像などの彫刻、絵画などの美術工芸品、建造物、動植物などの天然記念物や、人間国宝とも呼ばれる無形、お祭りなどの民俗…。形の見えるものから見えないものまで、大小関わらず多様な文化財が存在し、それらは国、都道府県、市町村とそれぞれの指定区分に分けられます。また指定とは別に登録文化財や、伝統的建物群などもあります。

一宮市には下の表のとおり、現在、国・県・市の指定など合わせて、325件の文化財があります。一見多そうに見えますが、文化財は現在保存の危機に立っています。特に民俗芸能やお祭りなどは、どこも後継者不足に悩んでおり、現在活動を休止している団体もあります。また修復など保存にかける費用にも限りがあり、全てに手厚い保護ができていたとは言えません。何年後かに、その数が減っている可能性は大いにあるのです。

令和6年度の企画展「いちのみやの文化財」（10月5日～11月17日）では、一宮市にある文化財から、学芸員が各々の専門領域に合わせて選んだ文化財を紹介いたします。建造物や天然記念物など展示が難しい文化財に関しては、パネル展示を行う予定です。文化財を守っていく重要性や、今ある文化財をどのようにして後世に守り伝えていくかを、本展を通じ考えていただければ幸いです。

（学芸員 瀧はる香）

【表】一宮市の文化財数（2024年3月1日現在）

区分		種別	一宮市						
			国指定	県指定	市指定	計	国登録	国選定	県登録
有形文化財	建造物		1	2	11	14	23		
	美術工芸品	絵画	6	7	39	52			
		彫刻	3	3	59	65			2
		工芸品	3	11	42	56			
		書跡・典跡	1	1	12	14			
		古文書	1			1			
		考古資料		2	14	16			
歴史資料			4	4					
無形文化財	芸能			2	2				
	工芸技術			1	1				
民俗文化財	有形民俗			8	8				
	無形民俗		3	6	9				
記念物	史跡	史跡	1	4	20	25			
		名勝	1			1			
		名勝地関係					1		
	天然記念物	動物							
		植物		2	28	30			
地質鉱物									
文化的景観									
伝統的建造物群保存地区									
選定保存技術							1		
合計			17	35	246	298	24	1	2



富田一里塚



北川田遺跡出土品



妙興寺 勅使門



島音楽人形

資料紹介 日本南画協会「一宮支部発会図録 全」について

今年度当館で開催した「尾張の文人画 森コレク ションを中心に」では、一宮の実業家の森林兵衛 (1855~1945) が大正15年(1916)と昭和5年(1930)に催した茶会の図録と、茶会に使用された茶道具や書画を紹介した。明治時代にはしばしば骨董商や煎茶の道具商人が大規模な茶会を催した。また実業家や政治家など有力者による茶会も盛んになり、書画や文房具、盆栽なども展覧された。煎茶道具を研究する愛知県陶磁美術館学芸員の田畑潤氏によれば、明治から昭和初期にかけて刊行された茗園図録は50冊を超え、昭和初期の森家の煎茶会は、煎茶流行期の最末期のものであるとしている。

この展覧会では、森家の旧蔵である山本梅逸など名古屋の文人画家の作品のほか、当館で収集されてきた半田の山本梅荘の作品と、梅荘に連なる森半景、脇田水石、岩田心斎など一宮の文人画家を紹介した。半景、水石、心斎の三名は、いずれも大阪の森琴石に師事している。本展覧会の図録を森琴石の子孫である森隆太・満代夫妻にお送りしたところ、満代氏が森琴石に関する調査記録を公開するウェブサイトに「森琴石・com」で紹介されている日本南画協会「一宮支部発会図録 全」についてご教示いただいた。本図録は森半景の兄・森半逸の旧蔵で、半逸の遺族から森夫妻に寄贈されたものであるという。森夫妻が発行に尽力された『森琴石作品集』(2010年)に掲載の楨村洋介氏による「地方文化と森琴石」でこの図録について言及されている。楨村氏は、一般に南画の衰退期とされる近代にあって地方では南画を嗜む人が増え、一宮においては森半景とのつながりから森琴石が当地での展覧会

を支える役割を果たしたと推察している。また、展覧会芸術が地方へと波及する中で、床の間芸術であった文人画も変革を余儀なくされ、一宮での南画展の立ち上げは、それを象徴しているのではないかと指摘している。

一宮での文人画(南画)の広がり調べるため、森夫妻に図録の借用を依頼したところ、快くお貸し出しいただいた。想像以上に大規模な展示と茶会が催され一宮の文人画家も出品していることが分かり、また図書館にも所蔵されていない貴重な図録であることから、ここにその内容を紹介し全文を再掲する。

日本南画協会は、明治29年(1896)、富岡鉄斎・田能村直入ら京都の南画家によつて結成された。『森琴石作品集』によれば、森琴石は田能村直入が明治24年に京都に開設した南宗画学校の展覧会で、明治28年と29年に入選している。日本南画協会は南宗画学校を合併する形で結成されており、琴石も南画協会の活動に関わったと思われる。

巻末の大雅堂定亮による跋文によると、本図録は、「日本南画協会一宮支部」の発会を記念して明治34年(1901)10月20日に催された煎茶会および書画展覧の記録である。明治34年は大阪で木村兼葭堂の百回忌の煎茶会と旧蔵品の展示もなされ、煎茶会が盛んな時期であった。また、博物館や美術館が少ない時代にあつて、煎茶席がその役割を担い、書画を展示・鑑賞する場となつていた。

図録の内容を見てみると、第一席の「新書画展覧」は現在も一宮市本町にある地藏寺を会場として、岩田心斎、脇田水石、森半景、森半逸ら一宮の画家のほか森琴石など同時代の画家による90点もの作品が展示された。茶席の床の間とは異なる美術館の展覧会のような様相を呈していたと思われる。第二席の「古書画展

観」は地藏寺近隣にあつた森林兵衛の兄・森林右衛門の別荘で催され、一宮の実業家や政治家など有力者が所蔵する書画62点が展示された。この頃、一宮では明治14年(1881)の一宮銀行設立を皮切りに企業の設立が活発化し、有力な資産家が活躍して一宮の礎を築いた時期であつた。数々の書画を出品した森東一郎、佐分慎一郎、土川寛太郎(弥七郎)、豊島半七、国島武右衛門はまさにそういった人々である。現在も一宮でつづく企業の創設者が多く見られる中で、京都で香や文具を商い煎茶会も催した熊谷鳩居堂が出品者としてあるのが興味深い。「庭園席」は刈安賀の庄屋・関戸家に設けられ、煎茶道具で名高い江戸末期の陶工・青木木米の涼炉が用いられている。第三席は「揮毫席・酒饌席」で、速水氏亭で開催され、田近竹邨ら京都の画家七名の名がある。酒の席で京都の画家が絵の腕前を披露したのであろうか。第四席の「煎茶席」は山下病院の創立者・山下隆の邸宅で開催された。煎茶道具のほか盆栽とともに椿椿山や渡辺崋山らの山水画を展示する席が設けられた。

巻末には、衆議院議員を四期務め一宮紡績の社長でもあつた森東一郎を筆頭に一宮の実業家17名の名が会の役員として列記されており、地元の有力者が主催してつづられた会であつたことが分かる。多くの地元名士たちがこぞつて文人画を収集し、茶会とともに盛大に展覧会を開催していたのである。一宮で活発化する経済活動を背景に、煎茶や文人画が盛んであつた時代を偲ばせる貴重な資料である。

(学芸員 杉山章子)

『一宮支部発会図録 全』

発行年不明 発会は明治34年(1901)
10月20日 ※旧字は一部新字に改めた。



表紙
19.0 × 12.5 cm



頌集眠露
歌石人
鉄斎外史 印



翰墨筵開天氣新
輕風暖日百花辰
胸中丘壑清成趣
腕底雲煙竒逼真
三椀爽神準井露
一彈悅耳錦堂春
盍簪倒屣忙來注
不見粉粉塵俗人
辛丑十月廿日日本南画協会一宮支部発会
席上所得一律録以代題辭
香溪望野億 印

第一席 ※青字は一宮の画家(杉山)
新書画展覽 地藏寺

淡彩晚秋煙嵐図 岩田心齋
同 柳陰捕魚図 富岡鉄齋
設色松鶴避齡図 池田桂仙
同 宜男長春図 青根竹泉
淡彩秋溪閑居図 長坂雲在
青緑驢背問秋図 山本梅莊
同 秋烟豊嶂図 松本白草
淡彩深溪霜厚図 山本石莊
水墨湘江呼舟図 兼本春篁
青緑衆山皆蘭図 石尾松泉
同 層巒秋霽図 森 半景
設色翠羽紫微図 内海吉堂
淡彩溪山訪友図 田川春莊
同 柳陰曳杖図 大雅堂六明
水墨初夏烟雨図 田近竹邨
淡彩秋山歸隱図 友石
水墨松泉清曉図 森 琴石

設色桃花白頭図	前田荷香	水墨直竿凌霄図	秦 金石
同 歲寒三友図	間島竹莊	淡彩玉井峽図	永井香圃
青緑蓬萊仙境図	秦 金石	設色秋汀雙鷺図	河邨虹外
淡彩江邨訪友図	河村虹外	水墨枯木八哥図	池田桂仙
水墨松風澗水図	望野香溪	同 高僧問道図	中川柏陰
同 山色溪声図	浅井柳塘	設色菊瘦蟹肥図	内海吉堂
設色不老長春図	奥田天門	設色霜柿立鴉図	松山鴨江
淡彩靜居自適図	鎌田梅石	淡彩溪山雨霽図	山本香雲
青緑武陵桃源図	児玉果亭	同 榴子遊禽図	吉田桂舟
水墨高士談古図	田能村直入	同 秋江閑泛図	関口老雲
淡彩秋林読易図	毛受楽齋	同 蕉窓看月図	兼本春篁
水墨夏山烟雨図	中川柏陰	同 富貴天香図	前田荷香
淡彩那智暮靄図	永井香圃	水墨松石不老図	山本梅莊
淡彩溪窓閑話図	関口老雲	同 江于遠帆図	長江少岳
設色春風燕菜図	松山鴨江	同 竹裡幽亭図	平野古桑
青緑霜溪暮靄図	山本香雲	同 萬年報喜図	大雅堂六明
淡彩瀟溪泛舟図	翠石	淡彩水亭午翠図	森 半景
設色月前宿雁図	織田杏齋	水墨松風夜雨図	富岡鉄齋
淡彩寒林暮鴉図	仙田半耕	水墨嶮谷清風図	間島竹莊
青緑秋山曙色図	津田洞庵	同 潤橋間筇図	田能村直入
設色老圃秋容図	田中雪華女	同 夏溪飛泉図	望野香溪
同 柳浪輕舟図	同	淡彩群峰秋色図	岩田心齋
同 雪姿霜影図	間島竹莊	同 曳筇尋源図	奥田天門
淡彩霜林孤亭図	眞野香邨	同 霜溪清興図	山本石莊
青緑松澗清暑図	脇田水石	水墨梅月相思図	吉田桂舟
設色楊柳觀音図	村上華雲	淡彩秋山雲樹図	森 半逸
同 寒江泛鴨図	森 半逸	同 小亭閑話図	間島竹莊
同 群芳争妍図	吉田桂舟	同 松壑雲泉図	岩田心齋
淡彩溪山霽雪図	辻 東山	同 層巒秋霽図	右同人
同 十六羅漢図	田能村直入	水墨山中独楽図	琴岳
新画紙本之部		淡彩山坡賞秋図	仙田半耕
設色百事如意図	田近竹邨	水墨溪亭閑話図	松井其榮
同 杜若水禽図	吉田桂舟	淡彩雲影濤声図	岩田心齋
淡彩寒汀孤舟図	山本梅莊	同 月下遊鹿図	森 松堂
水墨絶澗危橋図	浅井柳塘	同 猛虎嘯月図	右同人
淡彩疎林短亭図	森 半景	設色冬日牡丹図	河合梅溪

淡彩秋山歸樵圖
設色花下美人圖

山田松華
右同人



庭園席



第二席

第二席

古畫展觀

森林右衛門氏別莊

古画之部

庭園席
茗主 刈安賀 関戸氏
花瓶 古銅尊式
涼炉 白泥木米製
湯鐘 白泥急須式
茶鉢 紫泥小壺式
茶碗 南京窯山水模樣
托子 編籃
茶心壺 純錫六稜式
茶量 斑紋古竹
水注 霽青磁提梁式
中筒 白玉木葉式
帚 鶴羽
烏府 白竹提梁籃
菓器 金馬四方式
机 梧桐四方式
榻 交趾窯青磁六角式
卓 紫檀高脚安草畚大瓢
盆栽 青磁方盆栽一樹置高卓
水盤 茶葉磁円盤容西湖芦

海屋淡彩秋江放艇圖 絹本
杏雨同池亭看魚圖 絹本
訥齋設色春園孔雀圖 同
梅逸水墨鉄幹生春圖 同
逸雲淡彩林屋彈琴圖 同
海屋淡彩江干帆影圖 同
大雅堂淡彩李白醉歸圖 筠圍贊

原田平六
鶴飼安太郎
船橋儀右衛門
大伴千秋
吉田七十郎
内田歛太郎
天野佐衛門
大久保恭
森東一郎
大久保恭
小川元次郎
熊谷鳩居堂
森林右衛門
山下隆
渡辺市次郎
嘉言淡彩漁翁算鴨圖 同
同雪棧行旅圖 平洲贊同
杏雨同白雲紅樹圖 同
梅 同福祿壽圖 同
巽齋水墨江山清遠圖 同
文晁設色千歲樓閣圖 絹本

對山同松溪載鶴圖 絹本星岩贊
夙夜同江山無盡圖 巨幀
鉄石同蘭亭脩禊圖 絹本
雪齋淡彩山逕携琴圖 絹本
介石同秋林溪亭圖 絹本
竹溪青綠天保九如圖
對山設色雲中羅漢圖
椿山淡彩胡枝花圖
柏巖同一葦渡航圖 隱元贊
峯山同便面莊周像圖 尺牘添
竹洞水墨山林孤亭圖
第齋同秋江携舟圖
玉堂同溪橋曳杖圖
同 同烟波釣徒圖
鉄石同清溪放棹圖
百川設色蘆葉渡江圖
對山淡彩応真大士圖 絹本
佐分利新右衛門
華山同社日醉歸圖 同詩
竹洞設色魚鶴老游圖 絹本
大雅堂淡彩和歌三神圖
夙夜同王母像圖
鉄石水墨雪崖書屋圖 絹本
海屋淡彩疎林孤亭圖
笠山同溪山積雪圖 絹本
香雪同梅菊圖
山陽草題勿來関圖七絶
海屋淡彩松鶴圖
竹溪暢堂鶴仙合写設色楊太眞像圖
渡辺市次郎 絹本

吉田七十郎
森林右衛門
豊島半七
山下隆
日比野芳太郎
速水銳一
佐分熊次郎
山田松溪
大久保恭
土川覚太郎
山田松溪
鶴飼安太郎
神戶源助
野田喜兵衛
丸井義軌
国島武右衛門
神戶芳太郎
神戶芳太郎
佐分慎一郎
山田松溪
神戶芳太郎
山川保之郎
国島武右衛門
船橋儀右衛門
山川保之郎
木村甚九郎
豊島久七
竹溪青綠嵐峽春色圖
蕪村淺絳松窓閑話圖 同
張秋穀設色百事如意圖 同
雲峰水墨嘯虎圖
山陽画贊水墨春景松陰圖
大雅堂青綠蘭亭清遊圖 絹本
草坪設色秋山孤亭圖 同
鉄石淺絳秋景山水
左右星岸七絶三樹七絶三幅對
佐分熊次郎
森川久左衛門
森吉兵衛
白木評一
中村市太郎
森林右衛門
関戸藤右衛門
右同人



第三席

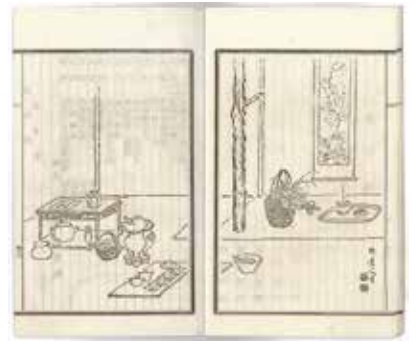
第三席
揮毫席
酒饌席

速水氏別邸

出席画家

京都

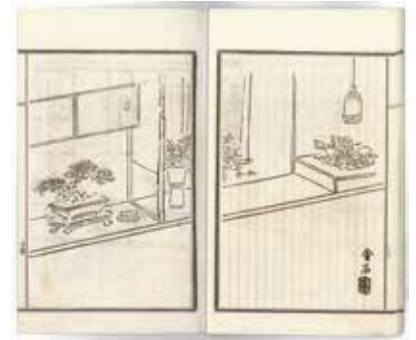
大雅堂定亮
望野香溪
秦金石
河邨虹外
中川柏陰
田近竹邨
奥田天門
山田松華



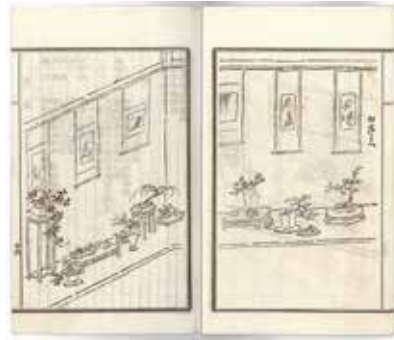
第四席

第四席
煎茗席

- 席主 山下氏邸宅
 掛幅 明朱士朗画紅葉山水 紙本直幀
 香炉 青磁彝式 置繫漆盆
 花瓶 明製編竹籠 挿牡丹花
 火炉 茶葉窯鼎式 芙蓉式檀坐
 湯罐 白泥急須
 茗瓊 南京丸花紋青花磁
 茗注 紫泥壹雙
 水注 紫泥直嘴有鑿者
 茶心壺 純錫張昆玉号円式
 托子 純錫菱花式
 茶量 明竹製彫七絶
 菓器 呉州赤絵福票
 中筒 交趾窯白磁
 架 古斑竹縁髹漆方式二層
 炭斗 古編竹籃 添火又羽帚
 甌 萬曆製円式綿氈座五座



副席



次席

副席

- 掛幅 竹田画設色馮小憐図 絹本直幀
 花瓶 粉均窯地紋尊式
 挿野薔薇雁来紅野菊
 匾額 山陽行書四大字
 同 象山行書二大字
 床石掖 老松大盆栽
 王中立画花卉長卷

床左掖

- 右二品置紫檀矮卓上
 水盤明製壽青磁円形点蕙花四五
 菓物数種盛梧葉式巨盤
 山陽書帖鎮子用紅瑪瑙印材
 右二品置琵琶床

次席

- 高芙蓉山水図
 高橋草坪山水図
 岡田米山人山水図
 皆川淇園山水図
 椿々山花卉図
 渡辺崋山山水図
 右畫皆小品展観壁間配置瓶花盆栽数種添
 風致



尾陽一宮諸氏相謀而設日本南

画協会支部ト辛丑十月二十日以

開雅筵矣夫文人画家自

居者必非平凡家為難得也

然有鑒識知之人殆罕而

亦為不易得焉今此举成蓋知

之偉哉世間貴奇貨古今通

誼耳如諸氏則非可貴之乎

頃本部幹事某々等製此

小冊子各図録當日盛事余亦

觀其実況因喜而為跋云

六明居士大雅堂定亮

(読み下し)

尾陽一宮諸氏相謀リテ而日本南画協会支部ヲ
 設ク。辛丑十月二十日トシテ以テ雅筵ヲ開ク
 矣。夫レ文人画家自ラ居ル者ハ、必ズ平凡非ズ。
 客得難キト為ス也。然レドモ鑒(鑑)識知有
 ル之人ハ殆ト罕ニシテ而亦得易不為焉。今此
 ノ举タル也、蓋シ知之偉哉。世間奇貨ヲ貴ビ
 古今誼ヲ通ズル耳。諸氏ノ如クハ則テ之貴可
 非乎。頃、本部幹事某々等此ノ小冊子、各図
 録製ス。當日盛事余モ亦其ノ実況ヲ觀ル。因
 テ喜ビテ而跋ト為スト云フ。

日本南画協会尾張国一宮支部役員

- 支部長 森 東一郎
 幹事長 丸井義軌
 幹事 土川覚太郎 森林右衛門
 内田歙太郎 神戸芳太郎
 同兼司計 中村市太郎 豊島久七
 商議員 関戸藤右衛門 速水鋭一
 神戸源助 山下隆
 村上敬一 原田清六
 丸井静三郎
 小川元次郎 森吉兵衛



裏表紙

※巻頭・巻末文の書き起こし及び読み下しは、
 一宮市博物館の下谷則子・松井雅文が担当し
 た。

収蔵資料紹介 法圓寺中世墓遺跡出土 蔵骨器について

法圓寺中世墓遺跡は、大和町馬引に現在も存在する法圓寺（西山浄土宗）境内の北側にある遺跡です。昭和6年（1931）、同寺の本堂を改築する際に、境内裏手の土砂を採取したところ、瀬戸、常滑、美濃須衛の骨壺10点が出土したことにより、存在が明らかとなりました。昭和56年には、住職から「境内裏手より骨壺と礫が大量に出土した」との連絡を受け、現地確認後、翌57年、第一次発掘調査を実施し、平成3年（1991）に第二次調査、平成4年に第三次調査の計3回発掘調査が行われています。

調査の結果、瀬戸、常滑、美濃などで作られた、火葬骨を納めた大量の蔵骨器（骨壺）と、五輪塔や宝篋印塔が石の中から出土しました。遺存状態もとてもよく、五輪塔や宝篋印塔を墓標とし、積石内に蔵骨器を埋納していた中世の墓形態が明らかになりました。昭和6年に発見された骨壺10点は、昭和36年3月27日に、平成3年・4年の発掘調査の遺物である蔵骨器66組86点と石塔14組48点が「法圓寺中世墓遺跡遺物一括」として平成21年6月24日に、どちらも一宮市指定文化財となっています。

本稿では、平成3年・4年の発掘調査で出土した蔵骨器を主に紹介します。



第二次調査の出土状況（北から）

そもそも蔵骨器とは、考古用語で、「主に日常で使っている器を骨壺に転用しているもの」を指します。陶器や磁器といったやきものが使われることが圧倒的に多く、ガラス、漆器、石などで作られたものも存在します。

法圓寺中世墓で見つかった蔵骨器は、全てやきもので、瀬戸、常滑、美濃須衛、東山、猿投、東濃といった窯業地で作られた四耳壺や瓶子、水注などが使用されています。瀬戸と常滑の製品が圧倒的な割合を占め、文化財指定となっている蔵骨器も1点を除き、瀬戸ないし常滑産です。また、山茶碗の碗や皿、片口鉢を蓋とした状態の蔵骨器も何点か見つかっています。

蔵骨器の生産時期を見ていくと、一番古くて13世紀前半代のものが確認できます。この時代は、瀬戸・常



蔵骨器出土状況（1号墓）

滑製品を中心として、美濃須衛、東山などの他の窯業地の製品が見られます。しかし14世紀になる頃には、他の窯業地のものはなくなり、瀬戸、常滑製品のみになります。これは、12世紀末に各窯業地で作られていた四耳壺が、13世紀には徐々に淘汰されていき、瀬戸と常滑に集約されるという生産地の動向と一致しています。

瀬戸窯製品は、この14世紀頃の古瀬戸中期段階のもののが最も多く出土していますが、15世紀になると数が減っていききます。対して、常滑製品は瀬戸製品より数は少ないものの、時期を問わず一定量安定して出土しています。古瀬戸中期段階は、瀬戸窯での生産のピークで、後期段階では失速していくため、瀬戸製品に関

しては、時勢と出土量の増減がおおむね一致していますが、常滑製品に関してはなぜ時期を問わず一定量出土するのかわかっていません。被葬者の階層等、生産地とは別の要因が考えられますが、詳しく考察するだけの材料が現在不足しています。

蔵骨器の生産年代から鑑みると、法圓寺中世墓は13世紀前半から15世紀後半までの遺跡になりますが、前述したとおり、蔵骨器は日常容器を転用しているため、製作年代と蔵骨器としての使用時期にずれが生じます。遺跡の時代に関しては、今後も他事例等との比較検討が必要ですが、他の出土資料からも判断すると、法圓寺中世墓は13世紀後半に造墓され、15世紀末には衰退した遺跡であるといえます。

出土した蔵骨器の中からは、全3回の調査で67個体の火葬人骨が検出されました。人骨は、800度以上の高温で長時間焼かれていたため、変形や収縮等で原形をとどめているものはほぼなく、ほとんどが小さな破片となっています。全ての骨を入れず、入れる骨を選別していたようですが、どの骨を入れていたかまではわかりませんでした。

骨を分析すると、性別と、子ども、成人、老人などのある程度の年齢は明らかになりましたが、それ以上の情報は得られませんでした。一部例外はあるものの、ほぼ単体埋納で、埋葬者の年齢は成人あるいは思春期以降のものと推定されるものがほとんどで、子どもは

わずか2例しかありませんでした。子どもは別の場所に埋葬されていた可能性も考えられます。被葬者がどんな人物なのか、どんな階層なのか、といった被葬者に関しては不明な点がとても多く、今後の課題です。

一部の蔵骨器には、意図的に頸部が打ち欠かれたものや、底部中央に直径1cmほどの穿孔があるものがあります。これらは日常容器から蔵骨器へ転用する際に行われたもので、現在二つの説が考えられています。一つは、蔵骨器内に水分が溜まり、埋納した焼骨が溶けるのを防ぐ水抜き説。もう一つは、日常容器から日常性を抜き、非日常の容器とする性抜き説です。どちらの説なのか、また全く異なる考えなのかは、はっきりとはしませんが、当時の人々が何らかの想いを込めて行ったことは間違いないでしょう。一宮市博物館1階常設展示室「いちのみや歴史絵巻」では、法圓寺中世墓遺跡の一部が再現展示されているほか、令和6年度秋に開催予定の企画展「いちのみやの文化財」でも一部紹介する予定です。資料をご覧の際には、この欠けや孔にも着目してみてください。

(学芸員 瀧はる香)



底部穿孔



頸部の打ち欠け

資料紹介 一宮の墨書土器について

はじめに

「墨書土器」とは、土器に墨で文字や顔などを書いた遺物のことである。木簡と同様、文字資料の一つである。須恵器や土師器などの普遍的なものから緑釉陶器などにも書かれることがある。

愛知県下における墨書土器は、約120遺跡からおよそ900点が出土している（愛知県史・2010）。時期は7～12世紀のもので、ほとんどが8世紀後半のものとされている。前述のように、須恵器などに書かれているものが多いが、東海地方を軸に展開する山茶碗にも例が認められるのは、この地方の特徴といえよう。



図1 愛知県 墨書土器出土範囲図
(愛知県史：2010より作成)

愛知県では、比較的全域で出土が確認されている（図1）。さらに、出土数や遺跡の位置などから、一宮市北西部、瀬戸市北西部、安城市南部などに偏りをもつことがわかっていく（愛知県史・2010）。図1を見ると、古代における愛知県下での識字層の広がりや、それに伴う施設の存在の可能性を各地域に見出すことができる。ただ、個々の遺跡での出土状況や遺跡の特徴、出土数や出土遺物の時期における地域の状況などをふまえ、考えていく必要がある。

一宮の墨書土器

ここまで概観してきたが、以降は一宮市で見ついている墨書土器についてみていく。一宮市の墨書土器に関しては、小川（1999）により門間沼遺跡（木曾川町門間）を中心とした集積が行われている。33点を網羅し、器種や墨書の内容についての傾向、地域別出土頻度などを統計化している。またそれらを基に愛知県史の中でも集積が行われている。ただ、割愛されているものもあることから、ここではそれらも含め再度傾向を探っていききたい。

愛知県史で取り扱われていないものや、カウントされていないものを含め、遺跡から出土しているものは市内では25遺跡739例が確認できた。表面採取（表採）や寄贈品などを含めるとさらに759例にのぼる。出土としては、市内北部と南東部に大きなまとまりを確認することができる（図2）。遺跡以外からは、萩原町、木曾川町、浅井町などで見つかった。まとまりのある2か所のうち、特に北部の門間沼遺跡や大毛遺跡などではかなりの数が確認されている。同じく北部のまとまりの一つである大毛池田遺跡からは「美濃」と刻印された須恵器も出土しており、美濃との関わりを持った人々とこの地方の出土分布には関係性があるかもしれない。

一方、南東集中部では、出土数は少ないものの伝法

寺廃寺などの出土例が多い。この地域にまとまりがある理由としては、伝法寺の存在や尾張国府との関係性などが考えられる。

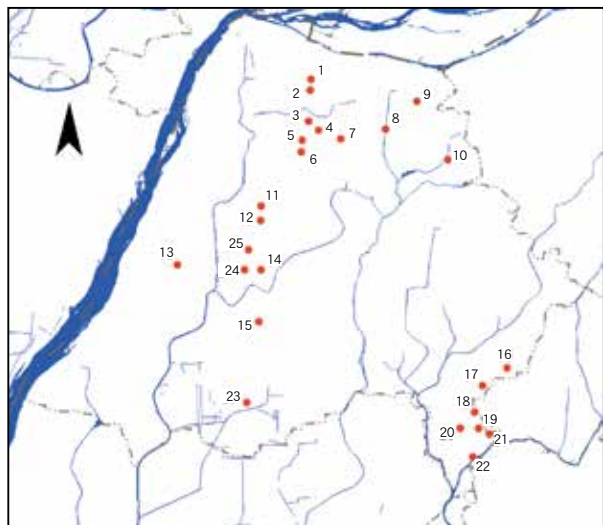


図2 出土位置図 縮尺任意
(本集成をもとに作成)

番号	出土地	数量	番号	出土地	数量
	市内	20	13	大平遺跡	33
1	北道手遺跡	21	14	法圓寺中世墓遺跡	1
2	田所遺跡	70	15	八王子遺跡	38
3	大毛池田遺跡	69	16	猫島遺跡	21
4	大毛沖遺跡	204	17	三ツ井遺跡	7
5	門間沼遺跡	144	18	元屋敷遺跡	11
6	門間遺跡	11	19	伝法寺廃寺	28
7	瓦ヶ野遺跡	4	20	西大門遺跡	6
8	清郷遺跡	3	21	伝法寺野田遺跡	1
9	奥屋敷遺跡	4	22	五輪ヶ淵遺跡	1
10	堂浦遺跡	1	23	東川田遺跡	1
11	西上免遺跡	22	24	馬引横手遺跡	31
12	東新規道遺跡	1	25	東苅安賀道遺跡	6

表1 出土地一覧 (番号は図2と対応)

表記について

墨書に書かれる内容については、記号のようなもの、数字、ひらがな、漢字、則天文字(一)、名前と思われるものなどがある。以下では、市内の例を紹介する。

①「田」

北部集中部によくみられる字。一字だけの場合もあれば、「大田」など二文字の場合もある。農耕生活などが由来に影響していると思われる。

②「大」

比較的全体に確認できる。やや北部集中部に多くみられるが、総数の問題か。一文字であるものが多数である。

③限定的に出土しているもの

これは、各遺跡でそこだけで確認されているものを指す。例えば、猫島遺跡の「財」やそれを含む文字、大毛沖遺跡の「公」や「金」、田所遺跡の「玉」などがこれにあたる。門間沼遺跡では「酒杯」と表記されているものもあり、特定ものや、使用用途を指していると考えられる。

興味深い表記内容のものは他にもあるが、特に「田」の表記が多いことは、昔から一宮が農耕に適しており、当時の生活にとって大事なものであったということ裏付けているのではないだろうか。

まとめ

今回は、墨書土器について愛知県内での出土と一宮市内での様相を概観した。調べてみると、県内でも広い範囲で見つかっていることがわかった。また、市内での出土例としては遺跡外からのものも含めると、およそ700点も出土していることが判明した。他にも、出土地域に偏りがあること、農耕が昔から人々の中では重要であったと推測できる資料があることなどがわかった。また、遺跡によって限定的に出土しているものについても確認することができた。

本稿では、県内の出土や市内の出土例を概観するだけに留まった。県内全域における詳細な出土分布や、表記内容の確認などについては考察、分析の余地を残す。また、市内例においても、表記内容の精査や傾向、刻書土器といった他の文字資料と合わせての検討も残る。これらを課題とし、今回の検討をこれからの手掛かりとして取り組んでいきたい。

(学芸員 中尾真琴)

(一) 漢字の字体の一種。中国、周(武周)の則天武后(614~705)が制定したもの。すべての漢字には及ばず、「天」「地」「日」「月」「年」「国」などいくつかの字に限られている。(『国史大辞典 第8巻』より)



写真1 元屋敷遺跡出土墨書土器：「下」

【参考文献】

- ・愛知県 2010 『愛知県史 資料編四 考古四 飛鳥〜平安』
- ・一宮市教育委員会 2000 『元屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- ・一宮市教育委員会 2020 『西大門遺跡・飯守神遺跡・五輪ヶ淵遺跡発掘調査報告書』
- ・一宮市教育委員会 2006 『伝法寺廃寺発掘調査報告書』
- ・小川芳範 1999 『尾張北部における古代の開発をめぐる様相・古代の門間沼遺跡と周辺』 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第80集 門間沼遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- ・財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1996 『大毛沖遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書6
- ・財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1997 『大毛池田遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書72
- ・財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1997 『田所遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書71
- ・財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1997 『西上免遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書73
- ・財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター 1999 『門間沼遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書80
- ・財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター 1999 『三ツ井遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書87
- ・財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター 2002 『八王子遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書92
- ・財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター 2003 『猫島遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書107
- ・葉栗郡木曾川町教育委員会 1972 『門間遺跡』
- ・尾西市教育委員会 1990 『大平遺跡発掘調査報告書』
- ・吉村武彦 2021 『墨書土器研究に関する文献目録稿 2019年度版』 明治大学古代学研究所

展覧会・催し物

所蔵品による企画展

川合玉堂と喜多村麦子ぼくし

4月20日(土)～5月26日(日)



喜多村麦子「ぼたん」

企画展

戦時下の一宮

7月13日(土)

～8月18日(日)

催し物

博物館で夏祭り!

7月13日(土)～9月1日(日)



企画展

いちのみやの文化財

10月5日(土)～11月17日(日)

民俗芸能公演

11月



島文楽

企画展

いちのみやアートアニニアル2024

12月7日(土)～12月22日(日)

所蔵品による企画展

くらしの道具

1月18日(土)～3月9日(日)

特集展示コーナー

墨コレクション 宮中の装い

4月16日(火)～6月30日(日)

瀬戸の陶工・鈴木八郎

7月2日(火)～9月29日(日)

没後60年 漢詩人 服部擔風とその周辺

10月5日(土)～12月1日(日)

鳥瞰図 描かれた観光地

12月3日(火)～2月2日(日)

尾張の洋画

佐分慎一郎と佐分眞の洋行体験

2月4日(火)～4月13日(日)



佐分眞「婦人像」



墨コレクション「袴袴」



「名勝木曾川を中心とする尾北交通名所鳥瞰図」(部分)

博物館キッズクラブ 新規会員の募集!

学芸員と一緒に博物館に展示してある様々な資料を見て、楽しみながら学びます。

▼対象/小学校3年生～中学生

▼定員/20名(抽選)

▼申込/4月26日(金)までに(定員に満たない場合は随時募集)、博物館ウェブサイトから申し込み。

常設展示年間観覧券

常設展示(特集展示や常設展と同額の企画展を含む)を、ご購入から1年間、何度でもご覧いただけるお得な観覧券です。ぜひご利用ください!



一宮市博物館だより

第67号

発行日/令和6年3月31日
編集・発行/一宮市博物館
印刷/モリプリント株式会社
※過去の博物館だよりは、館 Website でご覧いただけます。

一宮市博物館
愛知県一宮市大和町妙興寺 2390
電話 0586-46-3215
FAX 0586-46-3216
URL <https://www.icm-jp.com/>